

題名のない子守唄

2007(平成19)年9月17日鑑賞(テアトル梅田)

★★★★



第1章

映画は監督で観る！

監督・脚本=ジュゼッペ・トルナトーレ/出演=クセニア・ラバポルト/ミケーレ・ブラチド/クラウディア・ジェリーニ/ピエルフランチェスコ・ファヴィーノ/クララ・ドッセーナ/ピエラ・デッリ・エスポスティ/アレックスandro・ヘイベル/アンヘラ・モリーナ/マルゲリータ・ブイ (ハピネット配給/2006年イタリア映画/121分)

……名作『ニュー・シネマ・パラダイス』(89年) や近時の『海の上のピアニスト』(98年)、『マレーナ』(00年) というジュゼッペ・トルナトーレ監督作品とは明らかに異質のサスペンスタッチの傑作がここに誕生！ 何の説明もされないまま、スリリングに展開されていく物語から少しずつ見えてくる真相はかなり奥深いから、集中して観なければ……。それでも、あっと驚ラストは誰にも予想できないはず……。女の哀しみと、母性なるものをかみしめるとともに、映画鑑賞後、タイトルの意味を再度確認しておきたいもの……。

何ともすごい映画が登場！

私はこの映画のタイトルを見て、最近多いホラーものかと一瞬思った。しかし、何とこれは、1989年の名作『ニュー・シネマ・パラダイス』や近時の『海の上のピアニスト』(98年)、『マレーナ』(00年) の巨匠ジュゼッペ・トルナトーレ監督の最新作。

そういえば、『キネマ旬報』9月下旬号の「キネ旬チョイス」でこの映画がとり上げられていたことを思い出して読み返してみたが、たしかに『マレーナ』以来6年ぶりに発表されたこの『題名のない子守唄』は、これまでのジュゼッペ・トルナトーレ監督の作品とはかなり異色。つまり、サスペンスタッチがかなり濃密であるうえ、最初から売春市場で売買されるヌード姿のヒロインを登場させたり、かなりショッキングなつくり方になっている。私は事前の知識をほとんど持たないまま観たのだが、鑑賞後、何ともすごい映画が登場したものだと感じ！

ウクライナから、なぜイタリアのトリエステへ……？

この映画のヒロインであるイレーナ（クセニア・ラバポルト）はウクライナ人。東をロシアに接する東欧の国ウクライナは、その西に連なるハンガリー、ポーランド、チェコスロバキアなどと同じように、私には「悲劇の国」というイメージが強いもの……？ ウクライナ出身の女優ミラ・ジョヴォヴィッチは『バイオハザード』シリーズで強い女を演じているが、同じウクライナ生まれのイレーナは、その目に強い意思を感じさせるものの、何かに怯えているようで弱々しそう……？

この映画の舞台は、貴金属商を営むドナート・アダケル（ピエルフランチェスコ・ファヴィーノ）とその妻ヴァレリア・アダケル（クラウディア・ジェリーニ）夫妻、そしてその一人娘テア・アダケル（クララ・ドッセーナ）が住んでいるイタリアのまちトリエステ。ここは、ベネチアから列車で2時間、スロバキアとの国境に位置するアドリア海に面した北イタリアの港町で、「小ウィーン」と呼ばれることもある美しいまち、とのこと。ウクライナ人のイレーナが、なぜイタリアのまちトリエステへ……？ それがこの映画全編を通じるミステリー……？

これが同一人物……？

映画の冒頭、ビックリするようなエロティックなシーンが登場するので、まずはそれにご注目！ そこはイタリアの売春宿らしい。ハイヒールをはいた、ブラとショーツだけの若い女性が3人ずつ登場し、チェックされている。顔に仮面をつけているのは、顔で判断するのではなく、あくまで全身を使って奉仕する性的労働に適しているかどうかの判断を優先しているため……？ どこからともなく聞こえてくる、命令調の「下着を脱げ」との声に応じて露わとなる全身ヌードの美しさと、「よし、決まりだ」という声と合わせるかのようにはぎ取られる仮面の下の顔の美しさは……？

続いてスクリーン上は、髪を固くまとめあげ黒っぽい地味な服に身を包んだおばさんが、1人長距離バスから降り立ってくるシーンに。ここが北イタリアのトリエステであり、このおばさんがイレーナ。今、バスを降り立ってきたこの地味なおばさんが、あのヌード姿の女性と同一人物とはとても信じられないが……？

その後この映画は、トリエステのまちで家政婦となってアダケル家の中に入り込んでいこうとするイレーナの姿をじっくりと追っていくが、トルナトーレ監督はその合

間に、「黒カビ」ことムッファ（ミケーレ・プラチド）が支配する売春組織の中で、「性の奴隷」としてサディスティックにこき使われているイレーナの姿を挿入していくことによって、そのコントラストを浮かび上がらせるとともに、イレーナがトリエステのまちにやってきた目的を観客にあれこれを考えさせるネタとしてうまく提供するという手法をとっており、それが何とも刺激的……？

イレーナのミステリアス性 その1——仕事探し

スクリーン上では、ナレーションなどまったくなく、イレーナのミステリアスな行動が次々と展開されていく。その1はイレーナの仕事探し。バスを降り立ったイレーナは早速仕事探したが、ウクライナからやってきた外国人労働者がイタリアでまともな仕事を探そうとすればそれなりに大変なはずで、まずは職安に直行、というのが筋……。

ところが、なぜかイレーナはアダケル家が入っている高級レジデンスの中に入っていく、管理人に対してメイドの仕事はないかと質問した。こんな形で安易に仕事が見つかるはずはないと思うのだが、これも半分色仕掛け……？ 案の定、地味な服装ながらよく見ると結構美人だと悟った管理人のマッテオ（アレッサンドロ・ハイベル）は、「掃除の仕事ならあるよ」と再びイレーナを建物の中に招き入れることに……。そして、さっそくマッテオは「あんたイタリア人じゃないね。どこから来たの」と、ナンパ的アプローチを仕掛け、逆にイレーナは、仕事の紹介料として30%を渡すと利益誘導を……？

イレーナのミステリアス性 その2——アパート探し

イレーナのミステリアス性のその2はアパート探し。イレーナは不動産屋のすすめを完全に無視して、条件のあまりよろしくない部屋をあえて借りたが、それはなぜ……？ その部屋の窓からはアダケル家の部屋が丸見えだから、ひょっとしてイレーナの目的はそれ……？

またイレーナの行動のミステリアス性を象徴するのが、出窓に置いてある3つの鉢植えの手入れへの執着。本来のメイドの仕事の他、明らかに何らかの目的を持ったさまざまな行動でクソ忙しいのに、そのうえ鉢植えの手入れにまでえらく熱心なのはなぜ……？ ただ単に植物が好きだけとは到底思えないのだが……？

イレーナのミステリアス性 その3——遂にメイドに

共用部の掃除を一生懸命やっていたら、レジデンス内で働いている人たちと少しずつ仲良くなっていくのは当然。そんな中、イレーナが親しく話をするようになったのはアダケル家のメイドであるジーナ(ピエラ・デッリ・エスポステイ)。もっとも、それにも何らかの目的がありそう……？ なぜなら、一緒に買い物に行った時のおしゃべりにも、アダケル家の内情を探ろうという狙いが私たち観客にはミエミエだから……。アダケル家が入っている高級レジデンスの名物(?)は、大きなせん階段。もちろんエレベーターもあるのだが、エレベーターに乗ると閉じ込められた感じで気分が悪くなるというジーナは、いつもふうふう言いながら階段を上り下りしていた。手すりを持っているものの、もし途中で転び、まさかさまに下まで落ちてしまったら……？

ヒッチコックのサスペンス映画風にそんなことを連想していると案の定……。

イレーナのミステリアス性 その4——何を探しているの……？

後進国からの外国人労働者の受け入れに先進国が難色を示し、身元保証の確認を求めるのは、雇った外国人労働者が「悪さ」をするのではないかと、つい身構えてしまうため……？

階段から落ちて植物状態になってしまったジーナの代わりのメイドが早急に必要なヴァレリア夫人は、直ちにメイドを募集したが、そこですぐに目についたのが、共用部の掃除をしておりジーナとも仲良しだったイレーナ。掃除、洗濯など家事全般はOKのうえ、料理は？ と聞かれると「得意料理は、ミラノ風カツ、ジェノヴァ風パスタ、からすみのスパゲッティ。それにパイも」とスラスラと答えたからヴァレリア夫人はビックリ。なぜなら、これはアダケル家がよく食べている料理だったから。

こんなシーンを観ると、何ゴトにも周到な準備が必要なことがよくわかる。なぜならイレーナは、あらかじめ掃除婦の特権を利用してアダケル家が出した生ゴミを漁り、アダケル家の料理の好みをリサーチしていたのだから……。もっとも、車の運転は？ と聞かれ、とっさに「もちろん、できます」と答えたうえ、その後にはわか特訓している風景をみると、それにはちょっと苦笑い……。面接でそこまで好印象を与えれば、採用は当然。ところがメイドとしてアダケル家に入り込んだイレーナは、主人のドナートが一人娘テアを連れ出し、ヴァレリア夫人も外出したことを確認すると、あらか

じめ作っていた複製の鍵を使って、アダケル家の部屋の中をかぎ回り、引き出しという引き出しを開けて何かを調べ回っているからこりゃヤバイ……？

さらにイレーナは、ヴァレリア夫人が閉め切った部屋の中で一人大金庫のダイヤルを回すのを鍵穴からしっかりとのぞき込み、そのナンバーを確認。これだから、外国人労働者をメイドとして雇うのは怖い……？

イレーナの狙いは一体ナニ……？

イレーナのみステリアス性 その5——テアの教育方針は……？

アダケル家の一人娘テアは、自己防衛本能に障害を抱えていたらしい。したがって、もし倒れても、手をつけて自らを守ることができないため、どうしてもあちこち傷だらけになってしまうことに。これには両親も心配していたが、打つ手がないため、とりあえずは転ばないように用心するのみ……。

そんなことを知ったイレーナは、今やテアとの関係にも信頼関係を築くことができたことを受けて、両親が出かけて留守の時、テアとあるお遊びを……？

それは、テアの両手両足を縛った状態で布団の上に押し倒し、テアに自力で立ち上がらせるという、いわば起き上がりこぼし体操のようなもの……？ 最初は面白がって遊んでいたテアだったが、何度も何度も突き倒されていくうち、ついに「もうやめて！」と泣き叫ぶことに。しかし、それでもなおやめないイレーナの仕打ちは一体ナニ……？ これではまるで幼児虐待の典型みたいな行為だが、やっとな手をほどかれたテアがイレーナに殴りかかってきた時のイレーナの言葉を聞くと、これがイレーナの教育方針だったことが私たちにもやっとな理解……。

何ともすごいスパルタ教育だが、これによって以降テアの生き方には明らかな変化が……。しかし一介のメイドが、両親が留守の間にここまで徹底したスパルタ教育を施すのは一体ナゼ……？

少しずつ見えてくる「黒カビ」の悪行の数々……

そんなこんなのイレーナのみステリアス性が展開されていく中、時々フラッシュバック的にスクリーン上に登場してくるのが、サディスティックにあるいはマゾヒスティックに「性の奴隷」として奉仕させられている美しいイレーナの姿態。

ジュゼッペ・トルナトーレ監督はいじわるだから（？）スッキリとその裏のストー

リー(?)を観客に示してくれず、少しずつ小出しにしていくのだが、物語の中盤に至ってやっと「黒カビ」と呼ばれるスキンヘッドの男ムッファが売春宿のボスらしいこと、彼が性の奴隷たちをチェックして支配しているらしいこと、そしてイレーナはどうもそんな黒カビと特殊な関係にあるらしいこと、が少しずつ見えてくる……。

そしてある時、イレーナが裸で寝ている黒カビの胸にはさみを突き刺すシーンが……。なるほど、イレーナにはこんなすごい過去があり、イレーナはそこから逃げるようにイタリアのトリエステにやってきたというわけだ……。

すると今、イレーナのアパートの部屋が誰かに荒らされたり、テアとかくれんぼ遊びをしている時、つきまとうように男がイレーナを監視していたり、そして挙げ句の果ては、クリスマスが近づいたある日、イレーナが2人の男から殴る蹴るの暴行を受け、大けがをさせられることになったのは、ひょっとして黒カビの報復……？ すると、あの時はさみで何度も刺したにもかかわらず、黒カビはまだ生きているの……？

タイトルの意味は……？

撮影当時5歳だったというクララ・ドッセーナが演じるテアは、両親の愛を一身に受けて育っているらしく、天真爛漫(わがまま……?)そのもの。かつて日本を代表する美少女子役が安達祐実だったように、ハリウッドを代表する美少女子役はダコタ・ファニングだった。しかし、安達祐実は既に結婚して子供を産んでしまったし、ダコタ・ファニングも少女から大人の女になりつつあるところ……？ すると、次世代の美少女子役はこのクララ・ドッセーナ……？

そんな風に言われているクララ・ドッセーナが演じる可愛いテアの容姿は「フェルメールの絵から抜け出たよう」と称されたとのこと。しかし、自己防衛本能に障害を抱えているテアは大変だし、一見仲の良さそうに見えるドナートとヴァレリア夫妻もその内実は離婚寸前で、大声での言い争いはそりゃすごいもの……。

そんな中、この映画のタイトルである『題名のない子守唄』の意味が一瞬明らかになり、また電話で同じ唄がくり返されるから、それをお見逃さないように……。

イレーナはメイドに何を語ってるの？

この映画にはナレーションは全く使われていないから、観客はスクリーンに集中して複雑なストーリー展開を読み解く必要がある。

他方、人間は自分の罪を誰かに話したい、話すことによって気楽にしたいという本能があるよう。したがってキリスト教における神父への懺悔は、そんな人間の精神構造をふまえた適切なシステム……？ この映画でそんな役割を担うのは、時々ジーナの見舞いに訪れるイレーナが、今や車椅子生活で何の人間的な反応も示さないジーナに対して正直に自分の謝罪の気持を打ち明けるシーン。そりゃ、相手が何の反応も示さない植物状態であれば、いくら都合の悪いことでも気楽に話ができるというもの……。

ところが、イレーナがそんな風に安心してしゃべっていると、ある日ジーナに異変が起こったから、イレーナはもちろん、私もビックリ……。

ヴァレリアが抱いた疑惑とは……？ 一体どんな結末が……？

2人の男から殴る蹴るの暴行を受けたイレーナは、とりあえず管理人のマッテオに助けを求めたが、そこでのイレーナとマッテオとの会話はかなり微妙……。すなわち、マッテオはイレーナを一目見た時から好意を持っていたから、こんな風にイレーナが助けを求めにきたのは「飛んで火に入る夏の虫」……？ ところがその反面、イレーナと関わりになればかなりヤバそうという常識的な判断力も……。そこで成立する2人の「取引」もなかなか面白い……？

それはともかく、イレーナはなぜそんな暴行を受ける羽目に……？ ヴァレリアがそう考えていくと、イレーナの行動は何かと変……。イレーナの住んでいるアパートはどこ……？ その窓から我が家が丸見えになるのは一体なぜ……？ メイドのジーナが階段から落ちたのはひょっとして……？ そして、なぜイレーナはテアの心をあれほどまでにつかんでしまったの……？ そんな風に考え、イレーナの行動を監視していくと、ヴァレリア夫人の頭の中にイレーナに対するさまざまな疑惑が湧き上がってきたのは当然。

さあラストに向かって、いよいよあの「黒カビ」ことムッフアも本格的に登場し、ヴァレリア夫人の疑惑解明に向けた行動と、アッと驚く結末に向けた急展開が……。

もちろん、それをここで書くことは厳禁なので、それはあなたの目でしっかりと……。

2007(平成19)年9月19日記